

第2回
日本腰痛研究会

平成6年10月22日(土)
仙台国際センター

会長 桜井 実
東北大学 整形外科

第2回日本腰痛研究会開催にあたって

会 長 桜 井 実

腰痛は8割の人が体験する障害といわれ、二足歩行する人類にとっての宿命でもあります。身体活動の根幹として、また、体重を支持する重要な腰椎からの疼痛の発生は労働や生活の中で大きな悩みでもあります。事実、整形外科で扱う疾患の中で一番多いのが腰痛といわれています。

腰部の構築は骨格、関節、靭帯、馬尾および神経根など相接して身体の奥深く存在しているために、そこから発生する腰痛は、いかにも盲人が巨象の足を撫でるが如き感もあります。しかし、新しく開発されつつある画像診断や従来の検査手技の蓄積によって、かなり克明にその原因が追及されるようになって来ました。

そして、沢山の人が悩む症候群でもあるために、職業上の腰痛あるいは生活様式とも関連する病態の疫学的な研究も大きな対象ともなっています。これらはもとより医学という科学を駆使しながら最終的には日常生活と労働、そしてスポーツなど、人生の生き甲斐を支えるための総合的な医療行為につながるものであります。

この度の学会では「職業性腰痛とその対策」と題して労働省・労働衛生課でまとめた資料についての特別講演も予定されています。

米国の職業・産業整形外科センター(OIOC)の調査によると、1990年に米国において腰痛の治療に支払われた医療費は50ビリオンドルとされています。そして労働災害の補償のために払われたものは、その5分の1という統計も出ています。我が国においても各医師が個々に腰痛の患者さんに対応しているだけでなく、一つの研究領域を越えて各学際方面から、腰痛の予防と治療の研究を展開し、人類の悩みである腰痛を少しでも軽減するような方法と組織を開拓して行きたいと思っています。